



院内集会に参加して、私たちができること



2024年3月8日に行われた「崖っぷちから突き落とされる介護保険～これではもたない、在宅も施設も～」の院内集会に参加、初めての経験と場所に緊張と、少しのワクワクがありました。

集会が始まるとワクワクは一瞬にして消えて、発言者の声に聞き入ってしまいました。オンラインで見るよりも発言者の強い思い、現場の声がひしひしと伝わり、介護保険は今どうなっているのか、これからどうなっていくのかを、もっと近い感覚、自分事だということ、自分にできることをしていきたいという感覚になりました。全国各地から集まったエネルギーをたくさん吸収した時間になりました。当日はオンラインで同時配信されていたのですが、リアルタイムで視聴していた方が1,000人を超えていると聞き、関心の高さにも驚きました。現場の声に共感することもあり、こうして声を上げられることにすごいなと感じ、現場の声を国や行政に届け続けたいという気持ちにもなりました。

そうは言っても、現場のヘルパーの私に何からできるのだろうか…、そう考えたときに、ケアサポートえんのミーティングで話があがったパブリックコメントのことを思い出しました。こうしたコメントなら私でもできると思い、さっそく試してみました。

今回の参加を通じて感じたのは、関心を寄せて自分にできることから取り組み、そして継続していくことが大事だと実感しました。
(ケアサポートえん／石田法子)

当日、厚労省の職員を前にした質疑応答は熱気ムンムン。厚労省側は事前に出された質問に対する回答を淡々と読み上げていくが、私には正直わかりづらく煙に巻かれているといった感。それを世話人の方々が補足してくれて理解することができ、私も「知識」という武器を持って行かないといけないと感じました。結局「基本報酬は下がるので加算でプラスして経営をしていって下さい」とのこと。3種類に及ぶ処遇改善加算は複雑で、利用者と契約を結ぶ際、怪訝な顔をされることもあります。加算の条件や介護職員や介護事業の置かれている状況をその都度説明していますが、どこまで理解していただけているのか、確信は持てません。また、利用者の負担が重くなるのも事実です。幸いえんは加算に値する環境が整えられるけれど、そんな事業所ばかりではないのです。

現場からの発言では、地方は提供範囲が広域なので移動時間がかかる。時間に間に合わせるために朝6時に家を出ることもあり、買物代行では20km離れたスーパーに行く。雪の日は雪かきからその日の業務が始まる、等々。こんな実情なのに、同じ建物内の居室を訪問するサービス付き高齢者向け住宅併設事業所と一緒にされては困ります。

以前保育園で公立保育園の民営化の話が持ち上がった時、署名、要望書作成、市に質疑応答集会を開いた事を思い出し、自分の子供と同じように訪問介護の現場を守らなければと思ったのでした。
(ケアサポートえん／石塚恭子)